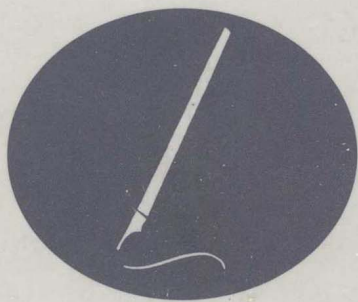


散歩する
精神 長田 弘



岩波書店

散歩する精神

長 田 弘

岩 波 書 店

散歩する精神

一九九一年二月二六日 第一刷発行 ©
一九九一年六月二五日 第三刷発行

定価二四〇〇円
(本体三三三〇円)

著 者 長 田 弘

発行者 安 江 良 介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二五五
発行所 株式会社 岩 波 書 店

電話 〇三三六五四二二(案内)

印刷・三陽社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN4-00-000886-2

目次

本の贈りもの

3

1 オーデンの幼年時代 5

6 不思議の国のハックスリー 54

2 犬とリングと本と少年 14

7 アメリカ三文オペラ 64

3 アンダスンと猫 23

8 ラニアンさん 74

4 世界はまるい話 32

9 ウイリアム・ルビーの幸福 83

5 とても風変りな動物 41

10 吟遊詩人よ、起て！ 92

本を旅する

103

1 カラミティー・ジェーン 105

7 ピーターとトランペット 132

2 木の上の部屋 109

8 自転車が好きですか 136

3 たった一人で生きた男 113

9 野球場につれてってよ 140

4 アイオワの農場の昔 117

10 郵便配達と犬 144

5 カルダーの手引き 121

11 朝食に何を食べた？ 148

6 愉快な校長先生の話 126

12 人生にひつようなものは 153

テーブルの上の本	157
----------	-----

1 地図	159
7 祈りの言葉	185

2 ヴーツ先生	164
8 単純な人間	189

3 小人	168
9 うじ虫	193

4 法螺	172
10 自由の人	197

5 墓碑	176
11 サラマンカの男	201

6 怪盗	180
12 本	206

木曜の男の夢	211
H・M・エンツェンスベルガーとの対話	211

注	247
---	-----

あとがき	251
------	-----

散歩する精神

本の贈りもの

1

オーデンの幼年時代



ロンドン、一九二二年。おおきな森をぬけてゆく道で、一人の少年が教会をののしった。すると連れだつてあるいていたもう一人の少年が反発して、はげしい言い合いになった。教会をのしった少年はウィリアム・モリスの好きな少年で、もう一人は聖歌隊の少年だった。二人は親友だった。二人の少年の言い合いはつづいたが、絶交にまですすむのがいやだったので、モリスの好きな少年は口をつぐんだ。

それから、ふとなにげなく、モリスの好きな少年は聖歌隊の少年に、きみは詩を書いたことがあるか、とたずねた。書いたことがない。聖歌隊の少年はこたえた。でも、書いてみるよ。聖歌隊の少年は顔をしかめていった。聖歌隊の少年はひどい近視だった。二人の

少年は仲なおりし、街にでて、カレル・チャペックの芝居をみにいった。チャペックがはじめてロボットをこの世におくりだした『R・U・R』と、『虫の生活』だ。とても気に入った。

「わたしが子どもだったとき……」

尻切れとんぼのその言いまわしが、いま

こんなにもわたしを悩ますなんて、いったいなぜだ？

W・H・オーデン（一九〇七―七三）は、晩年の詩にそう書きつけている。森の道での言い合いのあと、聖歌隊の少年は、教会なんて燃やしてしまえ、牧師なんて牢屋に入れてしまえ、と叫ぶ少年になった。噛んではかりいた爪が、いつか煙草ですっかり汚れてしまった。少年は詩を書きはじめた。第一次大戦が終わったばかりだった。オーデンは、二十世紀の最初の戦後の子どもたちの一人だった。

オックスフォードをでたあと、国をでた。ベルリンにいった。それからレイキャヴィークにゆき、もどってまた国をでて、ヴァレンシアにゆき、香港にゆき、もどってくると、こ

んどこそほんとうに国をでた。第二次大戦がはじまって、そして終わった。二どめの戦後がきた。詩も煙草もやめはしなかったが、戦争中にオーデンは、かつて燃やしてしまった教会にもどった。幼年時代をのぞいて、生涯のあいだ、オーデンは家庭というものをもたなかったし、もとうとしなかった。「漂泊者」とじぶんをよんだ。

無造作な人だったようだ。ハミガキのコップで、平気でコーヒーを飲んだ。いつもニュー・ヨーク・タイムズのクロスワード・パズルを手ばなさず、夜は九時になると、さつさと眠った。ニュー・ヨークのヒッピーたちの溜まり場のそばの窓のない部屋と、ウィーン郊外のちいさな村の家で暮らして、ある日旅さきの古い街のホテルの部屋で、たった一人で死んだ。部屋にのこされていた持ちものは、スーツケース一個と腕時計、それだけだった。

オーデンがそだったのは、医師の家だ。開業医でなく、一般医だった。家には馭者と料理人と二人の女中がいて、朝には巡回牧師がやってきた。朝食まえに、みんなで祈った。父も母も熱心なアングロ・カソリックだった。

家の書架には医学の本、考古学の本、古典がぎっしりとつまっていた。それから、エッダとサガだ。オーデンの父は北欧神話をとくに好んだ。それに母の家系は、もともとアイスランドの出だった。幼いオーデンは、トールとロキの世界、アイスランドの戦士たちの

伝説の世界にとらえられた。それと、アンデルセンだ。「氷のむすめ」がどんな物語よりも大好きだった。

子どものオーデンは、父の書架から、色刷りの図版のはいったドイツ語の解剖学の本をかくれてもちだして、ときどきこっそりとながめた。性医学の本も黙ってもちだして読んで、学校にゆくようになってからは、それを幼い仲間たちにもつたいぶって話した。へんな笑いかたをして仲間をじらし、知ってはならない秘密を知ってるんだというふうに、えらそうに肩をそびやかした。ワイセツな絵を画くのがうまく、話に医学用語をやたらとつかいたがった。文学の世界は疎い世界だった。父の書架には、かなりの探偵小説をのぞけば、文学書はほとんどなかった。

書架をみたしていたのは、父の薬学と疾病と神学への関心だった。父の書架をとおしてわたしは知識にたいする態度をまなんだ、とのちにオーデンは書いている。それは、知識とはそれ自身のために探究すべき何ものかなのだ、ということだ。

休日には、父と母は子どもたちを、しばしば丘陵につれだした。丘を下って、また上った。丘あるきから地質学への興味をかきたてられ、地質学への興味から、風景をちがったしかたでみることをおしえられた。子どものオーデンがまるで地質学の教授みたいな話し

かたをするので、訪ねてきた伯母はすっかり閉口した。

オーデンが好きだったのは、ライムストーン（石灰岩）のつづく風景だ。オーデンがここから愛したライムストーン、と詩人のジェイムズ・ライトは、オーデンを悼む詩に書いている。オーデンのいちばん親しかったすぐえの兄は、のちに地質学者になる。詩を書くようになってからのオーデンにとっては、詩はこの世界の地質学としてかんじられたにちがいない。

わすれられないのは、汽車に乗って、はじめて祖母のところに行ったときのことだ。汽車は炭田地帯を走りぬけた。幼いオーデンは過ぎてゆく光景にころをうばわれた。そして、おもった。なんてすばらしいんだ。石炭運搬車。ボタ山。機械の破片。それらの光景をすっかりじぶんのものにしたかった。

子どもは大事箱をつくる。宝ものをそこにに入れて、誰にもみせずにしまっておくのだ。

幼いオーデンのとっておきの宝ものは、水力タービンやワインディング・エンジンやローラー・クラッシャーなどが精密に画かれた絵だった。ながめていると、倦きなかった。機械にはごまかしがないし、かたちのはっきりしたものをみるのが好きだった。子どものオーデンの夢は、鉱山技師になることだった。だから、地下室ほど、オーデンをわくわくさ

せるところはなかった。地下室にいと、幸福だった。

鉱山技師になる夢は、詩を書くようになってからも、オーデンのころのどこかにずっと後まであったものらしい。三十歳のとき、オーデンはじぶんについてこう書いた。わたしは(トロッコのように)ベッドのうえに重いものをのせるのが好きだ。一番好きな乗り物は地下鉄で、部屋はちいさい部屋が好きだ。ちいさな部屋で、日中に厚いカーテンをしつかりと閉ざして、電燈をつけて、わたしは仕事をする。朝の九時からお茶の時間まで、休みなしで(鉱山技師のように)仕事をする。

オーデンの父は、サクランボを盗む人間をさらった。働いて報酬を受けとるのではなく、利益のために働く人間をさらった。節儉家だった。オーデンは父をみならった。トイレット・ペーパーをけっしてむだにつかわないというのが、オーデンの自慢だった。幼いオーデンの印象にのこったのは、料理人のアダだ。じぶんの仕事についてほんとうによく知っていた。それから、村のガス工場の職人たち。誰もが話をすることをたのしんで話していた。そのころの街の通りには、行商人や楽師や人形芝居屋といった連中が、たくさんいた。かれらはひつようなだけ稼ぎ、じぶんでじぶんの暮らしを立てていた。

食べものは、甘いものがきらいだった。ある日、悪戯をして、コーヒーマットに剝製の

鳥の羽毛を入れた。母は真つ青になって卒倒した。オーデンの母は牧師の娘だった。ロンドン大学でフランス語の学位をとり、大学をでると、アフリカの伝道病院で働くことをのぞんだ。ロンドンの病院で訓練中、オーデンの父と知りあった。アフリカにはゆかなかった。背が高くて、きびしい顔をした、とても知性的な人だった。オーデンは母親似だった。どんどんお母さんそっくりになってゆくね。近所の人が、幼いオーデンにいった。

オーデンは非常に早くから音楽好きだった。太い短い指で、たくみにピアノを弾いた。母とはよく連弾した。連弾して、二人して、『トリスタンとイゾルデ』の愛の歌を歌った。イゾルデのパートは、いつもオーデンだった。ずっとのちに、オーデンはじぶんをひやかして詩に書いている。ぼくのファースト・ネームはウイスタン。トリスタンと韻をふむ。だけどねえ、そんな間抜けだなんて、まったくもって願ひ下げ。オーデンは母を慕った。母は八人兄妹の末っ子で、オーデンは三人兄妹の末っ子だった。煙草のみになったオーデンは、どうしてそんなに煙草を吸うのか訊かれるたびに、きまっていた。子どものとき母の乳を吸いたりなかったんだ。

「お母さんなら、こんなこと、ゆるさないだろうな」というのが、何ごとにつけオーデンの口ぐせだった。オーデンは、たぶん死ぬまで、母の手書きの、赤いインクでゴシック